様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　5　月　31　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：　19520262
研究課題名（和文）＜翻訳＞の拓く批評可能性――ローベルト・ヴァルザーの作品の英・仏・日本語訳に即して
研究課題名（英文）　Translation and critical potential of text: A study on English, French and Japanese translations of Robert Walser

研究代表者
新本　史斉（NIIMOTO FUMINARI）
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：80262088

研究成果の概要（和文）：「長編小説」の枠からはみ出し、最終的には、掌大の紙片数百枚に鉛筆書きの極小文字で書きつけられるまでに至るローベルト・ヴァルザーの散文作品は、現代ドイツ語文学屈指の、高度な複雑性を抱えた、過激な文学実験となっている。本研究においては、ヴァルザーのテクストに潜在している批評可能性を、英・仏・日本語の翻訳テクストの比較分析、諸言語への翻訳者との討論、さらには、これまで未邦訳であった作品の日本語への翻訳実践を通じて明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：Robert Walser's prose beginning with short compositions of a fictional naïf schoolboy, culminating with three novels in Berlin and ending with tiny, densely pencil-jotted posthumous manuscripts is regarded as one of the most complicated and radical writings in the modern German literature. In this study we shed light on the critical potential of his text by comparative analysis of its English, French and Japanese translations, through discussions with translators in various languages, and in the translation practice into Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：ヨーロッパ語系文学
科研費の分科・細目：独語・独文学、ヨーロッパ文学（英文学を除く）、英米・英語圏文学
キーワード：ローベルト・ヴァルザー、翻訳理論、翻訳実践、比較翻訳分析、スイス語圏ドイツ文学、

１．研究開始当初の背景

本研究の着想は、2002 年度スイス、ローザンヌ大学滞在時に遡る。滞在中は Irene Weber Henking 教授の「翻訳学 (Übersetzungswissenschaft)」のセミナーに参加し、また、ローザンヌ大学文学翻訳セン

ター（Centre de Traduction Littéraire Université de Lausanne）の企画する翻訳をめぐるさまざまな講演会を聴講し、ドイツ語圏、フランス語圏における「翻訳」をめぐる学術的研究および知的関心について詳しく知ることができた。その中で、得た問題意識は以下のようなものである。（1）日本における「翻訳」の学問的・社会的位置づけの特殊性については歴史的背景をふまえた反省が必要であること、（2）分析対象をほぼ欧米言語間における翻訳に限っている限りでの「翻訳学(Translation Studies/ Übersetzungswissenschaft/Traductologie)」は表向きの開放性の背後でむしろ「ヨーロッパ的自意識」を強化するものとして機能しかねないある種の「偏り」を見せており、この点において、他の文化圏からの批評を必要としていること、（3）以上の２つの問題点については、日本語のみならずヨーロッパ言語による言語化・論理化が必要であり、学術論文およびシンポジウムなどでの討議を通じて、翻訳論の地平は拡大されなければならないこと、（4）抽象的な文化論、他者論に終始しがちである従来の翻訳論の陥穽を避けるために、議論は翻訳に対して強い抵抗を示す具体的な文学テクストに即して行われるべきであること、（5）翻訳についての議論と翻訳実践における試みを生産的に架橋すること。

こうした問題意識に基づいて、本研究の準備段階として、（1）2002 年にはスイスのツーク市主催翻訳者会議「ローベルト・ヴァルザーを翻訳する」（Zuger Übersetzer Gespräche “Robert Walser Übersetzen“）および（2）チューリヒ文学館における「外国におけるローベルト・ヴァルザー(Robert Walser in der Fremde)」に、（3）2006 年にはスイス、チューリヒ大学におけるシンポジウム「ローベルト・ヴァルザーを翻訳する」にパネラーとして参加し、英、仏、伊、西、ポーランド語翻訳者とヴァルザー後期散文の特殊性とその翻訳可能性／不可能性について議論した。（4）また勤務校から 2004 年度には「日本から見た翻訳論－ローベルト・ヴァルザー研究を出発点として」、（5）2005 年度には「翻訳から見た国際関係」、また（6）2006 年度には「日本の文脈における Translation Studies の可能性」の研究課題の下に特別研究費を受け、ヨーロッパにおいて形成されてきた「翻訳論」の歴史、日本における「翻訳をめぐる思考」の特殊性について調査研究した。その成果は論文の形では、（7）『「はじめて書きつけた慣れない手つきの文字」に出会うための散歩――ローベルト・ヴァルザーの散歩論』(『ドイツ文学』116 号、2004 年)、（8）『「イメージ」、「意味」、「物語」の／に抗する、レトリックを翻訳するために―R・ヴァルザー『白雪姫(Schneewittchen)』の英・仏・日本語翻訳比較―』(『津田塾大学紀要』第 38 号、2006 年)などにまとめた。

２．研究の目的

上記の研究背景をふまえ、本研究においては、ドイツ語散文として特異なまでに複雑性を増したものとなっており、いまだ十分に評価の定まっていない後期ヴァルザーの散文に潜在している批評的可能性について、英・仏・日本語訳の翻訳分析を通じたアプローチを行う。

具体的には、『ローベルト・ヴァルザー全集 17,18,19,20 巻』(Suhrkamp 社、1986 年)および『鉛筆書きの領域から(Aus dem Bleistiftgebiet)』（全 6 巻、Suhrkamp 社、2003 年）に所収されている散文作品の原文および英、仏訳（加えて研究代表者自身が研

究分担者とともに進めている日本語訳の草稿）を比較分析することを通じて、中期から後期にかけて過激な形で「散漫化」していく中で「長編小説(Roman)」の枠からはみ出し、ついには、掌大の紙片数百枚に鉛筆書きの極小文字で書きつけられるという極限的な存在形態に至るヴァルザーの散文が潜在的に有している批評可能性は、翻訳を通じてこそ、とりわけ、日本語のような親縁性の低い「遠い」言語への翻訳においてこそ、顕在的になりうるという点を明らかにする。

一方、このような特異な形式を持つテクストの翻訳作業の現場においては――とりわけ原文の文体までをも写そうと試みる逐語的翻訳作業の現場においては――翻訳先の言語自身が強烈に揺り動かされる。その震撼を通じて、漢字文化圏の周縁において成立し、明治期以降、西洋諸語の翻訳の影響も受けつつ現在の形となってきた「日本語」にいかなる表象可能性が含まれているか、また、「欧文脈」的影響を強く受けた「近代日本語」の標準的文体が、いかなる方向に向けて問い直されねばならないか、についても新たな知見が得られるはずである。

３．研究の方法

作業全体としては、各国語圏における翻訳論の最新の成果をフォローする一方で、ヴァルザーの中期の散文作品『散歩（Der Spaziergang)』から後期長編小説『盗賊(Der Räuber)』にかけて先鋭化してくる「散漫化」の運動（＝「主題化」、「物語化」、「イメージ化」によりいっそう抵抗する方向に展開していく散文の運動）が、英、仏訳においていかなる形で、抑圧され、あるいは救い出されているかを分析し、それを日本語に写そうとするとき、いかなる形の日本語の文体を要求するのかを明らかにする。

基本的に、研究代表者は日本語母語者として日本語訳文についての見解を述べ、研究分担者はドイツ語母語者としてドイツ語原文そのものについての見解を述べることから作業を始めるが、前者がドイツ文学を専門領域とし、後者が日本近代文学研究者でもあることにより、これまでの経験からしても、その役割は転倒し、むしろ、日本語を母語とする側がドイツ語原文についてあらたな読解可能性を見出し、ドイツ語を母語とする側が予想を超えた翻訳可能性を示唆するという事態が起こることが予想される。英・仏訳はそのプロセスにおいて、新たな読解可能性、翻訳可能性の妥当性、独自性を位置づけるためのきわめて有益な手がかりとなる。

以上のように、本研究の独自性は、研究のプロセスにおいて、ドイツ語、日本語のそれぞれを母語としながら、いずれの言語にも精通している二人の研究者が、さらに読解可能な言語をも参照しつつ、強烈な個性を持つテクストの細部をめぐって、密接なコミュニケーションを継続してゆく点にある。

また、本研究の成果は、学術論文のみならず、ヨーロッパにおける国際学会における学会発表、さらには翻訳実践の形で発表する。

４．研究成果

研究代表者、研究分担者の間での緊密な対話を続けつつ、研究代表者は 2007 年度および 2008 年度には、ヴァルザーの後期散文作品について各国語翻訳者との間で交わした議論をふまえた学術論文⑤、⑥、ヴァルザーの遺稿に遺された未発表長編小説の構造について分析した論文④を執筆した。研究分担者は、日本近代文学研究の観点から、日本語から欧米言語という逆向きの翻訳についての論考⑧、③などを執筆した。

共同研究の総決算の年度である 2009 年度には、研究代表者は、③、②、①の国際学会発表を行い、英、仏語、蘭語、ヘブライ語、

カタルーニャ語へのＲ・ヴァルザー翻訳者らとヴァルザー作品の批評可能性について討議した。とりわけ、②の英訳者 Susan Bernofsky との対談――ヴァルザーの長編小説 *Geschwister Tanner*『タンナ―兄弟姉妹』が（もっともドイツ語に近い言語の一つである）英語と（もっともドイツ語から遠い言語の一つである）日本語に訳されるときに、それぞれもたらされる新たな読みの可能性が、いかに相反し、同時にいかに補完し合うものであるかを討議した対談――はきわめて有意義なものであり、これらの活動を通じて、スイスにおいてもヴァルザーの日本語訳がもたらす新たな可能性についての理解が得られた結果、2010 年から 2012 年にかけて、研究代表者新本および研究分担者ヒンターエーダー＝エムデ・フランツを中心とした翻訳出版プロジェクト『ローベルト・ヴァルザー作品集』（全５巻、鳥影社）に対して、スイスの文化財団 Pro Helvetia より財政支援が得られることとなった。2010 年５月現在、校正作業中の第１巻『タンナ―兄弟姉妹』は、2010 年７月に刊行予定である。この作品の解釈可能性については、研究代表者が論文①において詳細に論じている。さらに研究分担者が論文②において新たな可能性を秘めた翻訳論として紹介している書物 Peter Utz: Anders gesagt-autrement dit-in other words.(2007)についても、研究代表者による日本語訳が現在すすめられており――残念ながら研究プロジェクト期間に完成できなかったものの――2011 年に、鳥影社より刊行予定となっている。

さらに、こうした議論と並行して、日本近代文学に潜在する可能性を翻訳の視点から明らかにしてゆく作業を続けるために、研究分担者は、博士論文以来の関係テーマである夏目漱石作品のドイツ語訳の可能性について学会発表⑥、⑤、④を行い、研究代表者は、ヨーロッパ文学における「自然主義」、「自己表象」という理念が日本に「輸入された」際に生じた翻訳上のねじれの問題について学会発表③を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①新本 史斉:「母の言葉」の喪失から生まれる「微笑む言葉」、「舞い落ちる」散文――ローベルト・ヴァルザーの小説『タンナ―兄弟姉妹』をその前史から読む――　査読無、津田塾大学紀要 42. 135-163 (2010)

②ヒンターエーダー=エムデ、フランツ: Peter Utz: Anders gesagt- autrement dit - in other words. Übersetzt gelesen: Hoffmann, Fontane, Kafka, Musil. München: Hanser、 査読有、Neue Beiträge zur Germanistik Bd 8/Heft 1. 170-173 (2009)

③ヒンターエーダー=エムデ、フランツ: ″失われたこころを求めて ― 近代人漱石の悩み ―″、福岡国際文化セミナー２００８ 続・日本の文化と心。福岡ユネスコ協会 査読無、第45号、43-49 (2009)

④新本 史斉:″ローベルト・ヴァルザーの「ミクログラム」論考Ｉ――長編小説『盗賊』における自己言及構造について″　査読無、津田塾大学紀要　41. 163-193 (2009)

⑤新本 史斉:″レトリックの翻訳不可能性と演出可能性-生の歓びを描くヴァトーを描くヴァルザーのテクストを翻訳する-″ 査読無、津田塾大学紀要 40. 149-170 (2008),

⑥新本史斉 : Irene Weber-Henking, Susan Bernofsky, Marion Graf, Fuminari Niiumoto, Teresa Vinardell Puig: ″Walser Übersetzen. Ein Gesprach mit Susan Bernofsky, Marion Graf, Fuminari Niimoto und Teresa Vinardell Puig（共著）″ Robert Walsers >Ferne Nahe< Neue Beitrage zur Forschung. 査読有、277-301 (2007)

⑦ヒンターエーダー=エムデ、フランツ: ″Interkulturelle Kompetenz. Neue

Herausforderungen für den Deutschunterricht am Beispiel Japan″ 査読有、Jahrbuch für internationale Germanistik 79. 101-106 (2007)

⑧ヒンターエーダー=エムデ、フランツ: ″現代文学を伝える～山口での自作朗読会～″ 査読無、異文化研究 1. 181-184 (2007)

〔学会発表〕(計 6 件)

①新本史斉: ″Übersetzungsprobleme zum Text *Der Spaziergang.*″ Novemberwerkstatt im Übersetzerhaus Looren. 2009 年 11 月 13 日、Übersetzerhaus Looren, スイス、チューリヒ

②新本史斉: ″Robert Walser - Interkontinental: Übersetzen aus Amerika und Japanim Gespräch. Podiumgespräch mit Susan Bernofsky und Fuminari Niimoto, und Reto Sorg.″ BUCH.09. Internationales Buch- und Literaturfestival. 2009年11月15日、Erlenmattstrasse 11, e-Halle、スイス、バーゼル国際書籍・文学メッセ

③新本 史斉: ″Was nennt man *Shishosetsu* ?—Kleine Überlegung zur „auto-fiktionalen“ Gattung der japanischen Literatur am Anfang des 20.Jahrhunderts —″ La Suisse dans ses autofictions - regards croisés、Journée de rencontres du réseau „Littératures Suisses“ 2009年12月3日、スイス、ローザンヌ大学

④ヒンターエーダー＝エムデ、フランツ: ″Translating Soseki’s ***Kofu*** into German Language: Some Aspects of Translation″ 国際日本学会第 5 回大会/THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR JAPAN STUDIES (IAJS), 5th CONVENTION 2009 年 11 月 14 日、福岡工業大学 Ａ棟（Ａ１２教室）

⑤ヒンターエーダー＝エムデ、フランツ: ″Übersetzungen von Natsume Sosekis *Ich der Kater* im Vergleich. ″ アジア・ゲルマニスト会議 2008 金沢大会、2008 年 8 月 27 日、金沢星稜大学

⑥ヒンターエーダー＝エムデ、フランツ: ″夏目漱石の『吾輩は猫である』を英・仏・独訳で読む～翻訳を軸とする漱石研究の試み″ 日本比較文学会春季九州大会 (60 周年創立記念)、2008 年 7 月 5 日、九州大学六本松

〔図書〕(計 1 件)

Ursula Keller: ″ヨーロッパは書く″ 新本史斉、ヒンターエーダー=エムデ、フランツ他訳 鳥影社 (2008)

６．研究組織

(1)研究代表者

新本 史斉 (NIIMOTO FUMINARI)
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：80262088

(2)研究分担者

ヒンターエーダー＝エムデ フランツ
(HINTEREDER-ENDE FRANZ)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：00209157